

ブルネイ華文文学の本土性について

－ 海庭、鷹、林松岸の作品からの連想 －

荒 井 茂 夫

初めに

筆者はこれまで普遍的文学ジャンルとしての微型小説の研究よりも「華文」と冠される特殊性に重点をおいて華文微型小説を研究してきた。その点では微型小説意外のジャンルも重要な材料である。ブルネイの華文作家の多くは詩作から文学の道に入っているという一凡の指摘（『東南亜華文文学選集』ブルネイ巻の序文）にしたがって見ると、確かに「東南亜華文文学選集」の序文の中で紹介されている19人の作家の著作は詩集が多い。

そこで本稿では、ブルネイ華文作家の詩を題材として、ブルネイ華文文学が抱えている本土性が希薄であるという王照英の評論をてこにして、この問題について考察する。ブルネイ華文文学の属性という問題意識からブルネイ華文文学を見ると、微型小説のみでは材料が足りないという問題もあるのである。

本論文は2006年10月27日～29日、ブルネイで開催された「第六回届世界華文微型小説研討会」で発表した論文を加筆補正したものである。

1. ブルネイ華文文学の特殊性

東南アジア諸国の華文文学環境はシンガポールを除くと、皆マイノリティーの文学としての様々な困難を抱えている。ブルネイ華文文学も共通する困難な問題を抱えているが、特徴的な問題は、華人口の過少と華人の地位の不安定に原因する華文文学規模の全体的な小ささであろう。1981年の人口調査では全人口192,832人の内華人は39,461人で20%を占めていたが、1984年独立後は増人口に対する比率も下がり2004年の統計では総人口365,250人中華人は15%を占めるだけでさほど増加していない。劉華源によれば、英国の統治時代にブルネイ華人は華人の利益を代表する政党や非政府民意機構をつくらず、ほとんどの華人が楽観的に考えていた。独立前に「華人の境遇がどうなるか分からない」という不安な状況下に、多くの専門家や石油技師・熟練工が出国するという移民潮流が起こり、また彼らが移民先で歓迎され、尊厳のある愉快的生活を送っているという消息が広まったために、本来移民を考えていなかった人達までも移民すべきかどうか動揺した。加えて独立後の政府も華人に対する市民権付与の問題や無国籍状況に陥った華人に対する政策などが不明なままであったために、華人の間に不安が広がった。その結果、第2波の移民潮流が起こったという。独立時期の華人口の20%が公民で、30%が永久居民、50%が臨時居民であったという。（一凡 P 21）公民になるには殊更に困難なマレー語の試験に合格しなければならず、合格するものは少なく、無国籍華人の救済は進まなかった。これによって大量の華人エリート層や商業的成功者、また知識人が流出し、当然多くの文学愛好者や読者も流出したのである。（劉華源「在变化中的文来華文文学生態」星洲

日報 2005 年 5 月 5 日)

独立からこれまで 22 年の間に華人人口はさして増加していないことが分かる。また 8 校ある華文学校も学制が変わって、華語教育は中心から外されたために華文文学読者人口も頭打ちとなり、文学後継者の確保も困難になった。

2. 林松岸の「本土性」について

こうした社会状況の下では、華文文学は規模の拡大による発展よりも必然的に質の向上に向かわざるをえない。この点は王照英の文章（「華文文学屹立不搖」星洲日報 2005 年 6 月 15 日）で指摘されているように、世界華文文学という大きな宝庫を文学的自己啓発の場として、また交流の場や読者市場として、さらに寡聞作家や読者が切磋琢磨して向上をめざす場として位置付けることによって、規模の小ささによる質の退行を防ぐことが出来るのである。正しく「在資訊十分發達之今日、沒有本國出版的華文報及沒有華文書店、再也不是汶華文學落後於人有說服力的理由。」（王照英）なのである。劉華源は、2004 年 5 月に成立した「ブルネイ華文作家協会」への参加者が少ない原因の一つに作家という名称が大げさに響いて文芸愛好者が自身を作家と称するには相応しくないと考え、結果的に参加したいと思う文芸愛好者を排斥することになっていると指摘している。しかしこうした問題は、文芸愛好者自身が意識の川を踏み越えれば、実に簡単な作家としての飛躍となろう。職業作家も元は皆“無名”作家なのであって、作家は必ず著名にならなければならない理由はないし、生活の全てを著作のために犠牲にすれば作家という名称に相応しくなると言うわけでもない。況や華文文学世界に職業作家として生計を立てている者は、ほとんどいないのではないだろうか。こうした状況を考えるとブルネイ華文文学は、ブルネイとしての個性を追求するばかりでなく、華文文学全体の中で発展を模索するという方向が展望されるのである。

たとえば林松岸の作風は、一凡によれば、ブルネイ華人の不安定な社会的身分や境遇（「ジブシー的」）をよく反映しているという。〈四季風〉（「秋天的過客」P 14）はその代表的作品で、「地に根を生やして定着したくてもしようがないという悲哀と落胆を深く表現している（「深刻的表達了這種無法落地生根的悲哀與無奈」）ものだと言う。生まれ育った国に正当な位置を得ることができない自身の境遇を「海に陸に漂泊する四季の風」（「在海上陸上漂泊」）に託して、何処へ向かうか知る由もないジブシーだと詠っているが、確かにブルネイ国家に対する帰属意識という点から見ると、5~6 万人の華人人口のわずかに 5%のみが公民であるというブルネイ華人社会の特殊な状況を反映していると言える。しかしその故に一凡が言うように本土性が希薄であるとは一概に言い切れないと思う。なぜならそれは作者が政治的或いは社会的帰属感をブルネイに抱くことと、自身が生まれ育った自然や文化に共感することとは別の話だからである。林松岸が、「出生地主義と生まれながら持っている権利を否定され、無情にも家族はばらばらになり、無国籍難民になってしまった」（「你否定了出生地主義和與生俱來的權利、且無情地是我家離人散、淪為無國籍難民」）、といて自らの境遇に悲嘆する所からは国家に対する積極的アイデンティティは表現されはしない。しかし同時に「ここは私が生まれた家であり」、「ここは私が育った故郷であり」、「ここは私に属すべき国であるべきだ」（「這裡是我出生的家園」「這裡是我成長的故郷」「這裡是應屬於我的國土」）、と言って大地に対する深い帰属意識を明確に表現している。一方彼の詩集「犀鳥鄉情」には〈長屋聽雨〉、〈河光山色的長屋〉、

<砂卓山>、<神山的故事>、<雨樹>、<拉讓江の現実>など、ボルネオの大地を賛美し深い愛着を表現している作品が非常に多い。<在丹絨馬魯沙灘上>（「犀鳥郷情」28頁）はタンジョンマルーの戦いで英国植民地主義に虐殺されたイバン族勇士に対する挽歌だと言えよう。これらは正しくブルネイが属するボルネオの大地に対する愛着と帰属意識の表現に他ならない。そしてその愛着や賛美は境遇が変われば「私が生まれた家園」「私が成長した故郷」「私に属すべき国」に対する賛美と愛着となっており、国家的社会的帰属意識に転化するものである。言い換えれば、林松岸にとって国家社会的アイデンティティの代替としてボルネオの大地に対する愛情が表現されているということなのである。その点では、ボルネオの華文文学という大きな範疇をたてて、サラワクの華文文学と共通するボルネオの郷土愛の表現ということも出来るわけだが、それは「本土性」がないということにはならない。なぜなら<四季風>に描かれたブルネイ華人の特徴はマレーシアに属するサラワクの華人状況とは異なるからである。「本土性」という言葉の概念は必ずしも郷土に対する直接的な愛着の表現でなければならないということではない。無国籍である故にブルネイ国家に対する帰属意識の表現が出来ないならば、ボルネオの大地に帰属し、大きな華文文学世界に自らの文学を位置付けることによって発展の方向を見出すことが出来るのではないだろうか。ブルネイの隣、マレーシア、サラワク州クチンの華人作家、呉岸が、自ら拉讓江畔の詩人（ラジャン河岸の詩人）と称しているのはマレーシア国家に対する帰属意識よりもボルネオ、サラワクに対する帰属意識即ち本土性を表象していると言えよう。油城（ブルネイの華文による別称）の詩人や油城の作家が国家の枠を超えて、世界華文文学に登場すればよいのである。

3. 海庭の本土性について

一凡はまたブルネイ華文文学には“本土文学伝統”はなく、本土性がないために特に個人の自我の表現に重点を置く方向にあると指摘している。（『沒有本土性以及側重表現個人自我的藝術導向』p21）“本土文学伝統”という文学史的特質というのは、多くの“本土性”を表現する作家や作品の蓄積によって形成されるものであるから、独立後わずか21年の短い時間と華人口の20%のみが公民であるという特殊な状況にあるブルネイ華文文学には文学史と称するだけの量的蓄積はないかも知れない。しかし本土性の概念について、「所謂本土文学が指すのは生活の周辺で起きる全てのことなのである」（『所謂本土文學指的是反映生活的周遭所發生的一切的文學作品』p21）と言うならば、それは日常性のことであり、やはり本土性をブルネイの個性の中に表現した作品は少なくないということに他ならないのである。

海庭の<移民組詩>は全編29章の長編である。「東南亞華文文学選集ブルネイ巻」では、その内の5章まで収録されている。この詩は、既に述べたように、ブルネイ華人社会と華文文学の特徴を形成する基点となった移民潮流の時代の日常の生活感触を詠ったものだ。第1章で、「将来の運命はどうなるか分からないのに、自国の月より外国の白い月が良いといって、誰も彼も移民しようとする。遠い昔父祖が赤脚空拳で、逃難してきたが、今度は血汗を流して稼いだ金と家族を連れて逃難しようとする。「いったいなにから逃げるのか」（「逃的是什麼難」）と言って疑問を投げかける。2章では、うらぶれた町の情景を詠み、3章、4章で移民の悲劇を詠い、5章では、移民組詩はこれが始まりにしる終わりにしる、移民が失敗になっても責任は自分にある（「算錯了自已負責」）と言って、移民潮流に対して冷眼を向けている。6章から28

章まで、自分の家族の移民をめぐる感慨も含めて、個別の事象を詠い、最後に自然の時間の流れに仮託して（移民潮流）は「既に過ぎたことではないとしても、お日様のような熱はすでに冷め、次の一局をどう進めるか、よく考えるときになった。」と締めくくる。本土性を表現した傑作と言うべきではないだろうか。

この＜移民組詩＞の全編は＜朶朶鮮鼻串起来＞と言う詩集に収められている。同詩集にはこれに関連する幾つかの詩が掲載されている。＜那些年＞（そのころ）は、移民潮流の中で人々が焦燥に駆られて移民の道を探し求めた時代は名状しがたい恐怖と矛盾に深く飲み込まれていた。移民の前途は分からないが、とにかく目前の焦燥よりは、彼方に希望を見出せたのである、と詠い、「潮流はこのようにして巻き起こり、様相は変わっていった」という。その変わった様子を＜変＞、＜木箱＞等の作品で詩的に表現している。前者は教室からクラスメートが一人また一人といなくなり、子供たちの数が減少した教室で、先生が生徒の対して皆前列に座るように命ずる情景を描き、後者はあの道この道、家々の前に並べられた家財を積んだ大小の木箱が、毎日少しずつ海を越えて無くなっていく様を描いているものだ。＜傳＞は10行の短い詩だ。うらびれた1940～50年代に戻ってしまったような、2000年の時点の町並みに呆然としてたたずみ、記憶の中から灼熱の道路を自動車が行き来する様子を引き出す、というだけの作品だが、移民熱から15年以上経た今日における感慨を詠うもので、＜移民組詩＞とこれらの詩群は、ブルネイ華人社会の時代的特徴を背景としたブルネイ華文学の本土性をよく表現しているものである。

林松岸の作品と同じく国家に対する強い帰属意識が表現されているわけではない。またこの作品の本土性を感じ取ることが出来る作品は、必ず深い情緒的な帰属意識が表現されている作品でなければならないということはない。日常の生活描写から自然に表現されるものなのである。それがブルネイ華人の本土性の特徴であり、ブルネイ華人社会の身分に関わる特殊性を反映しているものである。

4. 日常性と“本土性”

ブルネイ華文学は、「ブルネイに民選による国会がないので国民の政治に対する関心が薄く、また天災人災もなく国泰民安の環境にあるので時に感じ国を憂える、といった類の作品は少ない。ブルネイ華文学の発展の可能性は、作者自身の人生、人性、天地宇宙などの普遍的課題に対する思索を表現する方向にある、」と言っているが、この点については海庭の作品にも確かに見られる傾向である。彼の詩集「人生酔過」には97編の詩が納められているが、その内、人生（回顧、恋愛、朋友、交際、決断、仕事、生活情景、追憶、理想等を詠む）に関するものは27首あり、最も多い。継いで天地自然そのものを読む作品が19首、天地自然現象に人生を仮託する作品が11首、身辺瑣事が18首、悲惨な外国の様子や外国のベトナム難民、アフリカの戦争など之作品が17首、社会問題等5首、のように分けることができる。また陳登忠氏に頂いた作品は散文32、詩は90首ある。詳しい解説はしていないが、ざっと見ると、ほとんど全てが人生及び生活瑣事に関わる内容である。ひとりの作家のまとめた作品をこのように見ると、王照英の指摘する普遍的課題に対する思索を表現する方向にあるのは確かに当たっていると言えよう。ただそれがブルネイが君主政体、即ち王制で国泰民安であることとの因果関係については、作品を通しての証明はできない。

王照英が指摘するように本土文学が「指すのは生活の周辺で起きる全てのことなのである」ならば、日常性を描いたさまざまな文学ジャンルの作品から本土性を読み取っていくのが研究者の仕事となる。そうした視点から「汶華文萃」(汶萊華文作品選集)から鷹の二作品を読み解くと、やはり日常性と本土性を明らかに読み取ることが出来るのである。

鷹の〈郷村〉はブルネイ独立以前に学生週報に掲載された作品なので、平明だが、大自然に囲まれて田野を遊び場とし、椰子と緑に囲まれた郷村で成長し、ドリアン、マンゴスチン、巴巴令などの熱帯の果物を心待ちにした少年期の思い出を描いた散文詩と言うべき文章で、生まれ育った土地に対する愛着を表現しているものである。

また〈帰途上〉は、やはり郷村を背景に、原住民族農民の争いを水牛、果樹園(果子園)、バナナ畑そして降頭(ゴンタウ)という土着の呪術を巧みに配置して日常性と本土性を描き出している微型小説である。

5. 終わりに

このように見てくると、ブルネイ華文文学に本土性がないとは一概に言えないが、「鮮明な“本土文学伝統”がない」のは時間と作品や文学批評の蓄積が少ないことに原因するという指摘はその通りであろう。しかし、もっと重要な原因はブルネイの特殊な国情(君主制、国泰民安、政治に対する無関心、華人の身分問題等々)にあるというならば、些か考慮する必要がある。つまり、華人の身分問題を除いたブルネイの国情は華人以外の国民にも当てはまることなのである。であるならばマレー人の文学状況はどうなのだろうか。やはり感時憂国の文学はないのではないだろうか。マレー語文学の本土性は如何に表現されているのだろうか。むしろ広くマレー文学世界の中に属するのではないだろうか。聞くところによるとマレー語文学の組織はあるが、毎年ブルネイ大学で授賞式が行われていて、作家も出席者もブルネイ大学の先生ばかりで、ブルネイのマレー語文学の世界は大きくないということであった。ブルネイの華文文学はこの点も比較してみなければならない。むしろ人口比から見ただけならば華文文学の方が大きいかも知れないのである。

華人の身分問題に関連して、たとえば華人人口の5分の1が公民に属せず、永久居民或いは無国籍である故にブルネイ国家に対する帰属意識の表現が出来ない、或いは希薄であるならば、ボルネオの大地に帰属し、大きな華文文学世界に自らの文学を位置付けることによって発展の方向を見出すことが出来るのではないだろうか。サラワク州クチンの呉岸が、自ら「拉讓江畔」の詩人と称しているのはマレーシア国家に対する帰属意識よりもボルネオ、サラワクに対する帰属意識即ち本土性を表象していると言えよう。油城(ブルネイ)の詩人や油城の作家が国家の枠を超えて、世界華文文学に油城の本土性を発信していくことはブルネイ華文文学発展の方向の一つと言えないだろうか。